

園庭の身近な自然が保育を変える ～命を感じる園庭～

講師

小泉 昭男

小泉造園代表

1. 子どもの環境を考える

遊びは子どもにとって一番大事なものだと考えます。今、実体験が希薄だからこそ子どもが育つ場所である園の環境を見直すべきだと思っています。

残念ながら子どもは自分で環境を選べず、虐待などの厳しい環境にいる場合もあります。虐待を受けている子どもが園にいることがあるとも聞いています。そんな中で子どものしんどさを早く見つける力が保育者には必要で、いかに子ども、命を守るかを考えてほしいと思います。当たり前ですが“子どもが好き”とか“かわいい”だけでは子どもは守れません。これは保育者の皆さんの課題です。

2. どのような園庭環境が必要か

園での環境では、まずは安全（地域も含めた安全）が必要です。そして子どもが目をはなせる遊びが園庭の中で繰り広げられる環境が必要です。幼児期にしかできない遊びの中で、非認知力（やる気、自信、忍耐力、計画性、協調性、粘り強さ、観察力等）が生まれ育まれると言われ、遊びの大切さが世界的に認められてきています。園庭にあるものはすべて遊びの要素だと考え、身近で手の届くところにある自然（園庭の自然）を豊かにしてほしいと思います。

園庭の固定遊具で遊ぶ子どもを見ると、私は“遊具で遊ばされてると考えています。また、グランドのような園庭も多いです。多様な自然環境を園庭に作ることが、身近な自然に触れ合う一番の近道だと、私は考えています。日本は季節の移り変わりがあり、そこに付随する生きものがたくさんいます。その多様性の中で子どもが育つということが大切です。

3. センスオブワンダー

『センス・オブ・ワンダー』（著 レイチェル・カーソン）はぜひ読んでほしい1冊です。センスオブワンダー（神秘や不思議さに目をみはる感性）は、自然に対して動き、子どもの時に発動しやすい感性です。書の中では“知ることは感じることの半分も重要ではない”と言っています。乳幼児期はまず感じる事が大事です。感じるだけではなく、自然の中で感情も知性も協働して、知識や知恵を生み出します。ある保育園で「先生草刈ったらバッタいなくなる」と言った子どもがいました。この子は毎日バッタを捕って遊ぶ中で、バッタは草の中にいて草が必要だと感じました。そして知恵を働かせ“先生が草を刈ったらバッタがいなくなり僕の遊びが無くなる”と訴えたのです。このようなことは保育の中にたくさんあります。それを保育者は感じられているのでしょうか。書の中では“くらしている世界の喜び、感動、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人は必要”とも言っています。分かち合える大人がそばにいないければ、子どもは次のステップに行けないのです。

4. 身近な園庭を整備する

ある園で、夏になると滑り台の滑る面（ステンレス）が熱くなって滑れないということで相談を受けました。滑る面の両端に苗木を植えると、滑り台の上に木が生い茂り、夏でも滑れる状態になりました。また他の園では苗木（ムク、エノキ、ナラ、カシワ）を植えて、園庭の一部を森のような環境にしました。その際、ネムノキ、クヌギ、コナラなど早く成長する樹木を選びます。苗木を植えるなど工夫すれば、コストを抑えても環境は

整えられます。園は、長い年月その土地にある施設なので、地域のことを考え在来の樹木を植えてください。在来種を植えることで、在来の生きものがやってきます。

ある園のレンギョウのトンネルは、夏は葉が茂り、冬は枯れる、春には黄色の花が咲くというように季節を感じられます。普通の遊具で季節を感じることはむずかしいです。夏、レンギョウの葉のトンネルの中は涼しく、冬には枯れた木の枝に大カマキリが卵を産みました。レンギョウが生きているから、そこに生きものが関わりこのような体験ができるのです。

八瀬野外センターに関わっておられた伊佐先生（植物学者）は『園庭は季節を感じる窓』と言っておられました。子ども達の触れ合う所に植物を植えることによって、季節を感じられます。園庭環境を、緑化ではなく遊びの要素、収穫、生きものの命との出会いの場として考えてほしいです。

5. 植物で遊びの要素を作る

園の植物は観賞用ではなく、遊びの要素です。子どもは見ているだけでは面白くありません。遊ばずに見ているだけなら図鑑と同じです。植物遊びはその時期しか遊べない、季節限定です。例えばドングリやフジの実（おはじき）、ムクロジの実（シャボン遊び）、おじぎ草などは遊びの要素を持つ植物です。

子ども達の触れ合う所に植栽することによって、植物採取、木登り、かくれんぼ等、遊びが大きく広がります。また植物は季節の変化、季節の移行を知らせ、子ども達に時間の感覚と自然のプロセスを伝えます。自然にはほどほどの危険があり、それが大事なことでもあります。

また、いろいろなものに見立てられる自然素材が、イメージを豊かにし遊びを広げます。キャラクターの遊具だとそのキャラクターにしか見えませんが、例えば木の根っこだと子どもが様々なものに見立て、遊びを共有したり広げたりできます。これが遊びだと私は考えます。

6. リスクとハザード

子どもは木登りが大好きですが、それには少しリスクが伴います。『リスクは遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となる。子どもの発達にとって必要な危険性は遊びの一つの価値。小さなリスクから学ぶことで経験的に危険を予測して事故を回避できる。ハザードは遊びの価値とは関係ないところで事故を発生させる。子どもが予測できない・危険を予測しないでやることはリスクの挑戦とは言えない。』（国交省「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」より）つまり小さなリスクを子どもに与えた方が良いと国が言っているのです。怪我については保護者の理解が必要で、日頃の保育を通して信頼関係を築くことが大事です。

7. 園での畑・田園づくり

園で畑や田園づくりをするとき、私は収穫が第一ではないと考えています。命をいただくことや、そこから自然を感じることを大事にしてほしいと思います。収穫までに様々な生きものが関わっていることなどに興味関心を持てるよう働きかけてください。例えば、バケツ稲作をしてあまり収穫ができなくても、茶わん一杯のコメの収穫で、赤とんぼ1匹、ミジンコ10万匹、カエル3匹、ヒガンバナ1本、ジシバリ2本、涼しい風10秒、地下水1200Lが守られると言われています。

園で草を取っていると、出てきた虫をさわりだす子がいます。子どもはいろいろなところに興味を持ちます。「今何するとき？」などと言わず、子どもの気持ちに寄り添い、一緒に喜んだり、面白がれる保育者であってほしいと願います。また、保育者自身が植物に興味を持ち、知識を広げる必要があります。例えばビワの花は12月に花を咲かせ、メジロやヒヨドリが受粉させます。鳥のおかげで実がなったのに人間は欲深いもので鳥に食べられないように袋をかけたりします。

庭で実った果実を使ってお誕生日にその子だけが食べられるゼリーを作って祝うという園の取り組みがありました。卒園してからも子どもの

心に残り、20歳を過ぎた同窓会の時に話題となっていました。このような心に残る園庭活動の取り組みが出来るという一例です。

8. 生きものとの出会い

危険の少ない虫や小動物は遊びの要素となります。それがきっかけとなり他の生きものへの関心も増大させることがあります。また生きものを媒介に、子ども同士がつながることが出来ます。命と命のつながりを見たり、体験したり、命の不思議を感じたりすることが、やがて科学する力を生み出します。

また害虫、益虫というのは人間の見方です。みんな一つの命です。ゴキブリもカブトムシも同じ命です。ゴキブリは32億年かけてこの形になりました。もし絶滅したらまた32億年かけてできた生命を、簡単に殺さないでください。特に子どもの前では殺さないでほしいと思います。

多様な自然の生きものに触れることで、子どもの好奇心、探求心や知恵を思う存分発揮します。蝶々は食べる草が決まっています。観賞用の花壇ではなく、食草を植えて生きものが来る花壇にすれば、子ども達は園庭の花壇で生きものと触れあうことができます。食草が柑橘系のアゲハチョウの幼虫がキャベツを食べている写真を見ました。キャベツはアブラナ科でモンシロチョウが食べる植物ですが、ミカンの葉が無くなったので、入れたら食べたそうです。身近に食草がなければ、他の植物でも食べるようです。このようなことは学校で教えてくれることではなく、育ててみて経験できることです。

イラガやチャドクガは刺される毛虫です。特にチャドクガは毛が風に飛んできて刺され、全身に湿疹ができます。ツバキなどの木は遊びの要素がありますが、チャドクガの食草だと知り、植える時にはそのリスクも考えなくてははいけません。

9. 命を感じるには

命を大事だと感じるには、たくさんの虫にふれ、たくさんの花を摘み、たくさんの命に出会い関わ

る経験が必要です。それを幼児期に体験せず、いつできるのでしょうか。幼児期に虫や小動物にさわる経験がなければ、そのまま大人になってしまう可能性が高くなります。一生さわれないかもしれません。どの時代でも乳幼児は虫が好きです。生きものにふれる機会を与えてあげてください。クラス全員が興味を持つ必要はありませんが、興味を持つような働きかけは必要だと思います。

畑仕事の際、見つけたカナヘビを子どもがさわると、のどが鼓動を打っていると感じ、命を感じていました。本来爬虫類を素手で触るのはよくないのですが、命を感じてほしかったので素手で触ることを優先しました。死なないように、逃げないようにカナヘビを持つという力の入れ加減が、子どもにとっては難しく微妙です。生きものを飼育したとき死んでしまうことを保育者は嫌がりますが、そこで『死』というものを感じることが大切です。生きものは必ず死にます。それを見ることも大事なことはないでしょうか。

10. 幼児期の体験が将来を左右する

残念ながら失敗が出来ない環境に追いやられている子どもがいます。園は失敗出来る場であってほしいと思います。生きものを飼育して死んでしまうことも失敗と言えるかもしれませんが、経験して命を感じてほしいと思います。

子どもは、大人が無駄だと思うことをします。大人は無駄だと知っているからやりませんが、子どもには無駄を踏ませてあげなくてははいけません。例えば、セミ捕りをして捕まえられなくても、その失敗が次の工夫につながります。生きものを媒介に、子どもが自由に発想していろいろな経験をし、遊びが展開できるということが大事なことです。幼児期の体験がその子の将来を左右することもあります。デジタルな体験で子どもを満足させるのではなく、身近な自然の中でできる実体験をさせてください。

11. 答えではなく問いを与える

学校教育は「知識の伝達型」であることが多い

のですが、保育には教科書はありません。多様な考え方があります。いろんな考えを持って保育する方が楽しいし、おもしろいと思います。本来の教育は、大人から「何を学んだか」ではなく「どう学ぶか」ではないでしょうか。学校はアクティブラーニング的な学びに変わりつつあるようです。「なぜだろう」が置いてけぼりになり、すぐに答えを出そうとする傾向にあります。知識を詰め込む学びではなく、実体験からより詳しく、より深く「なぜだろう」と考えることが大事です。

ある子どもがダンゴムシとワラジムシを見て、おじいちゃんに「ダンゴムシだけが丸くなるのはどうして？」と聞いたそうです。おじいちゃんは「なんでだろうね？」と問い返しました。「じゃあ、ぼくが調べる」ということで10年間研究し、中学生の時にダンゴムシの糞の中にインド洋の深海でしか見つかったことのない防カビ効果のある物質が含まれていることを発見しました。このように興味のある子はのめりこみ、すごい発見につながる場合があります。

子どもが興味を持つには、遊びが大事です。好きな物を見つけると、遊びの中で主体的に学ぶことが出来ます。大人に教えてもらい、受動的に学んだことはすぐ忘れてしまいます。自ら興味を持って関わり「なぜだろう」とのめりこんで考えるようになることが学びにつながります。

12. 保育者の役割

五感はその子どもの時に、自然や植物、身近な生きものに触れ、様々な感覚を通して感じることでとぎすまされます。そのためには、子どもがいろいろなことを感じられる環境と共感する大人の存在が大切です。「環境が子どもを育てる」のです。だからこそ環境を整える必要があります。多様な環境を与えてあげると、子どもはちゃんと自分で取り込んで成長します。そして子どもが自然に親しむには大人が大きな役割を果たします。近くにいる大人がその不思議さやおもしろさに共感することで、子どもの探求心に火をつけます。保育者も耳を澄ませて虫の声を聴いたり、園庭の植物

に興味を持ち、いつ花が咲くのか、どんな虫が集まるのかなどを知り、子どもに共感し一緒に考えることが、次の知識や知恵を産みます。

また、一人一人が大事といいながらも、みんなと同じことをさせようとしてはいいのでしょうか。想定外の行動をとるのが子どもだと理解し、その子を認め行動の見方を良い方向にすると、一人一人の姿が豊かに見えてきます。子どもが遊ぶ中で自然を感じながら、様々な発見をしたり、達成感が味わえるよう、遊びを見守ったり言葉をかけるのが皆さんの役割です。

13. ブラックボックスの時代

何となくイメージできていた時代から、今はブラックボックスの時代へと変わっています。パソコン、メール、クラウド等、便利に使っていても実態がわかりません。イメージできない、考えなくていい時代になってきています。だからこそ、イメージ出来る身近な自然が子ども達の近くにあることが必要だと考えます。中には豊かな自然とはいえない園庭もあると思います。都市部ではマンションの立ち並ぶ中にある園もありますが、“豊かな自然に関わるより、自然と豊かに関われる身近な環境を整備すること”が大事だと私は考えています。街路樹やその下に育つ植物などの小さな自然でもいいのです。いかに豊かに関わるかが大切で、そのためには保育者の関わりが重要です。

『聞くことは忘れることなり。見て聞くことは覚えることなり。見て聞いてやってみることは理解することなり』という中国のことわざがあります。今日参加された皆さんは、ぜひ園に帰って、子ども達に「命」の大切さを伝え、自分たちの住んでいる身近な自然を知り、豊かに関われる環境作りの実践をはじめてほしいと思います。子ども達をどこに導くのかを考えるときのようです。

令和3年度第5回共同機構研修会 令和3年7月12日 於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館
--